

琉球語きかいしまかみかてつ喜界島上嘉鉄方言の談話資料*

白田理人・山田真寛・荻野千砂子・田窪行則

0 はじめに

琉球語喜界島諸方言（以下喜界島諸方言）は、鹿児島県大島郡喜界町で話されている、琉球語奄美方言群に属する方言である。喜界島諸方言は、音韻面、特にアクセントの先行研究はあるが、形態統語面の記述は少なく、また一部の方言に限られる。喜界島諸方言は語彙面・音韻面・形態面に渡って方言差があり、特に上嘉鉄集落で話されている方言（以下上嘉鉄方言）には他の喜界島諸方言の多くには共有されていない特徴がある。

本稿は、上嘉鉄方言の談話資料と簡易文法¹を提示する。簡易文法は談話資料の理解のための補助的資料である。データは国立国語研究所の共同研究プロジェクトとして 2010 年 9～11 月に断続的に行われた調査と 2011 年 3～4 月の追加調査で得られたものを用いる²。

以下、第 1 節で上嘉鉄方言の概要を述べ、第 2 節で談話資料、第 3 節で簡易文法を示す。

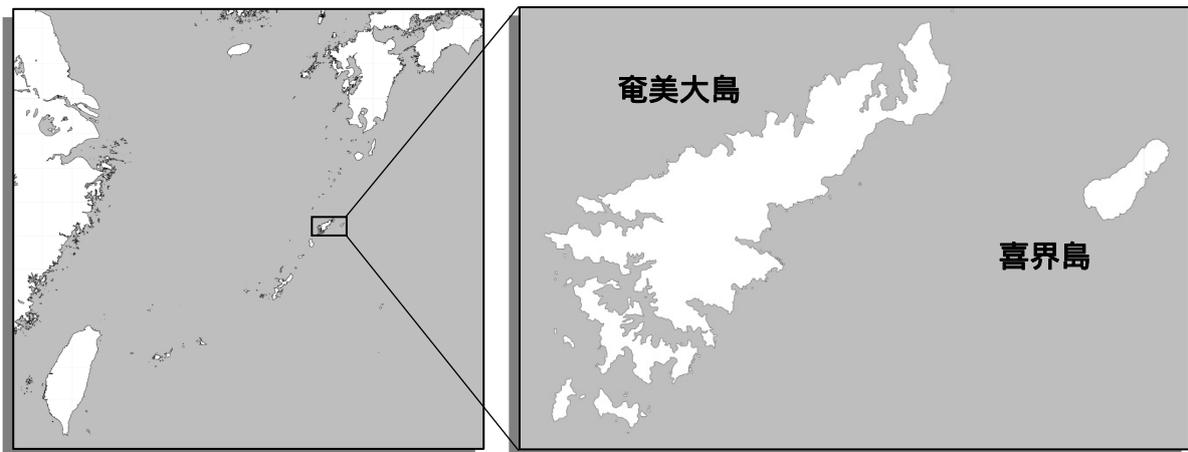


図 1 喜界島の位置³

* 本稿は国立国語研究所の共同研究プロジェクト（消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 代表 木部暢子）の成果の一部を報告するものである。

¹ 簡易文法の内容・構成に関して、琉球語宮古伊良部方言を扱った下地（2006）および琉球語宮古池間方言を扱った林（2009）を参考にしている。

² 2010 年 9 月の調査は著者を含む 30 数名からなる調査団が数名ずつの班に分かれて行ったものであり、10・11 月は著者のみ、2011 年 3～4 月は白田のみで行った追加調査である。扱ったデータは上嘉鉄出身・在住の 80 代男性 2 名・70 代男性 2 名・女性 2 名・60 代男性 1 名・50 代男性 1 名・40 代女性 1 名・20 代女性 1 名を調査協力者とする談話および聞き取り調査のデータである。9 月の調査のデータに関しては、著者以外の班の収集したデータも利用している。なお、9 月の調査のデータは国立国語研究所（2011, 未刊 『「危機方言」プロジェクト報告書（1）喜界島方言に関する総合的調査研究（仮題）』）として刊行予定である。

1 上嘉鉄方言の概要

本節では、上嘉鉄方言の話者数、他方言との方言差と相互理解性、先行研究、系統関係について述べる。

1.1 話者

上嘉鉄方言の話者はすべて喜界島共通語（日本語）⁴とのバイリンガルである（本稿では、日本語に琉球語喜界島諸方言が基層として干渉したものを、暫定的に「喜界島共通語」と呼んでいる）。喜界島共通語へのシフトが進行しており、40代以下では複数の集落の方言特徴の混在する方言と喜界島共通語のバイリンガルである年代を経て、喜界島共通語のみを話す年代へと漸次移行している。上嘉鉄集落／喜界島全体の人口は2010年10月末現在でそれぞれ472／8327人⁵で、喜界島諸方言／上嘉鉄方言の話者は年齢別人口からそれぞれ約250／約4000人と推定される⁶。

1.2 喜界島内の方言差・相互理解性

喜界島島内には30余りの集落があり（次頁地図参照）、集落間で語彙面・音韻面・形態面にわたる差異があるが、島内の方言間には相互理解性がある⁷。

特に上嘉鉄方言と島内他方言で違いが見られる例として、接辞および屈折形式における差異を次頁にいくつか示す。

³ 本論文の地図（図1, 2, 4）は全て国土地理院発行の地図データをもとに Thomas Pellard 氏（京都大学／日本学術振興会）に作成していただいた。

⁴ 喜界島共通語は、主に喜界島諸方言を解しない世代あるいは島外出身者を含む会話場面や、フォーマルな場面で用いられる。特に語彙面・音韻面に喜界島諸方言からの干渉が見られる。琉球語が話される地域では、一般に日本語にその地域で話される琉球語の方言からの影響が見られる共通語が話されており、沖縄地方では「ウチナーヤマトゥグチ」、奄美地方では「トン普通語」と呼ばれる（狩俣2008）。喜界島共通語も「トン普通語」に含めうる可能性もある（喜界島より大きい単位、例えば奄美地方全体で一つの共通語を共有していると捉えうる可能性も否定できない）。なお、喜界島諸方言の母語話者は喜界島共通語を「普通語」と呼び、喜界島諸方言と区別する。

⁵ 人口は喜界町役場の資料に基づく。

⁶ この推定話者数（約250／約4000人）は、上嘉鉄集落では50歳以上、喜界島全体では55歳以上が方言話者であるという仮定に基づき、喜界島全体の人口データ（年齢・性別ごと）および上嘉鉄集落の人口データ（性別ごと）から算出した。上嘉鉄は他の多くの集落に比べより若い年代でも方言が話せると言われているため、想定される話者の年齢層の下限を上嘉鉄と喜界島全体で異ならせている。なお、島外からの移住者はきわめて少ない。

⁷ 各集落の方言話者が混在する職場では、おのおのが出身集落の方言を使い、問題なく会話がおこなわれる。

表 1 上嘉鉄方言と島内他方言の違い

	上嘉鉄	荒木・小野津・志戸桶・中里
引用標識	[teN]	[tɕi]
具格標識	[seN] ~ [heN] ~ [eN] ~ [jeN]	[zi]
動詞継起形語尾 ex.) 「食べて」 ⁸	[eN] ex.) [kameN]	[i] ex.) [kadi]
動詞継続非過去形語尾 ⁹ ex.) 「飛んでいる」	[o:ri] ~ [oN] ex.) [tubo:ri] ~ [tuboN]	[ui] ~ [uN] ex.) [tudui] ~ [tuduN]

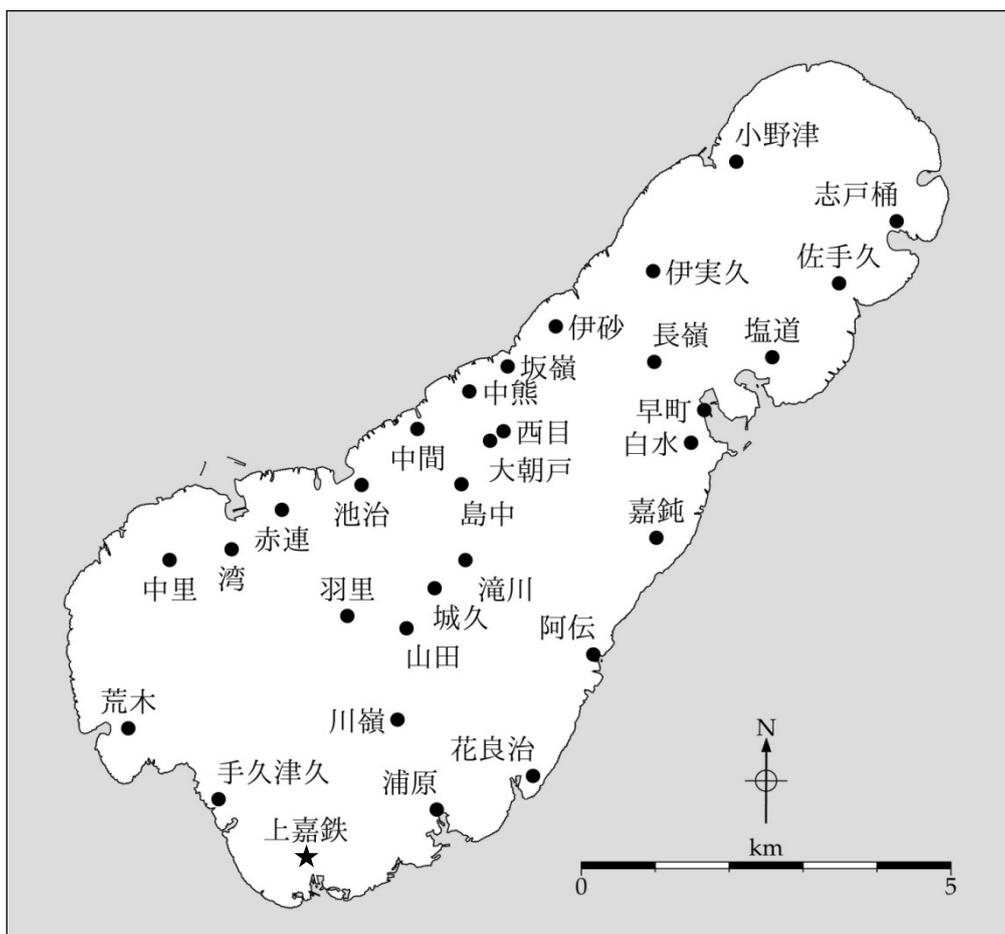


図 2 喜界島集落一覧

⁸ 上嘉鉄方言にも [kadi] という屈折形式は見られるが、通常単独で継起形として用いられない(3.2.2.1 参照)。

⁹ 上野ほか(1994)では、継続相における上嘉鉄(及び川嶺)の方言と島内他方言との語形の違いについて、前者は「連用形+ヲリ(存在動詞)」に対応し、後者は「連用形+テ+ヲリ」に対応するという通時的な説明がなされている。(ただし、奄美・沖縄方言群一般に通常相も「連用形+ヲリ(存在動詞)」に由来する形である(上村 1972, 服部 1977)。このため上野ほか(1994)では、上嘉鉄・川嶺の継続相の語形は「連用形+ヲリ(存在動詞)」に由来する形にさらにヲリが後接したものであると指摘されている。)

1.3 先行研究¹⁰

上嘉鉄方言を扱った先行研究としては、語彙集として岩倉（1941）、日本語との分節音の対応に関する大野（2003）、アクセントに関する松森（1991）・上野（1992）・上野ほか（1993, 1994）、動詞「来る」の活用を記述した中本（1990）などがある。これまで上嘉鉄方言の共時的な体系の記述はなされていない¹¹。

1.4 系統関係

喜界島諸方言の系統的な位置づけに関して、比較言語学的方法論に基づく先行研究はないが、いくつかの方言区分が提唱されている。喜界島諸方言を含むグループのみに着目すれば、奄美・沖縄方言群¹²に属するとする点では先行研究で一貫しているが、この方言群の下位区分は諸説ある（春日（1974）・上村（1972, 1992）・輝（1982）・中本（1984）¹³など）。特にこの方言群に属する方言を奄美方言群と沖縄方言群に二分するか否かで議論が分かれる。次頁図3に春日（1974）の二区分説と、上村（1972, 1992）の三区分説を図示する（上村（1972, 1992）では喜界島方言が三区分のうちのいずれに属するかは明言されていないので点線で奄美・沖縄方言群に属することを示す）。上村（1972）の区分の根拠とされているのは、それぞれの方言で生じた歴史的音韻変化による音韻的特徴と動詞の屈折形式の一部である。これらは共通の改新（innovation）ではなく並行的な改新の可能性があり、系統的な位置づけの根拠とならない。本稿では暫定的に春日（1974）と同じく、喜界島諸方言を奄美方言群に属するものとして扱う。

¹⁰ 島内他方言の共時的な体系の記述としては、管見の限りでは中里方言の音韻（分節音）に関する輝（1981）、荒木方言の名詞形態論に関する輝（1982）、坂嶺方言の音韻（分節音）に関する輝（1984）、志戸桶方言の名詞・動詞形態論に関する内間（1978）のみである。

¹¹ 大野（2003）は、琉球語と日本語の分節音の歴史的対応を論じる際に重要な（すなわち、二言語間または琉球語内の諸方言間で異なる音変化を経た）分節音についてのみ記述しており、共時的体系の記述ではない。

¹² 琉球諸方言を沖縄本島以北の諸方言と宮古島以南の諸方言に分けたうちの北グループである。なお、奄美語・沖縄語・宮古語・八重山語・与那国語の5言語など、複数の言語を認める立場もある（Pellard 2009）。本稿で用いる「奄美方言」や「沖縄方言」は便宜上のものであり、琉球語を一言語とするか複数の言語を認めるかという問題に関して特定の立場を採らない。

¹³ 中本（1984）は二区分説を採り、かつ音韻的特徴（中舌母音の有無）の違いを根拠に喜界島方言を北部方言（中舌母音の見られる小野津・志戸桶など）と南部方言に分け、奄美大島北部／南部方言・徳之島方言・喜界島北部方言が北奄美、喜界島南部方言・沖永良部方言・与論島方言が南奄美としてそれぞれ別の方言群をなすとしている。しかし、この区分は別の音韻特徴（通時的に日本語東京方言の八行子音に対応する子音）を基準とした区分とずれが生じることが狩俣（2000）で指摘されている。

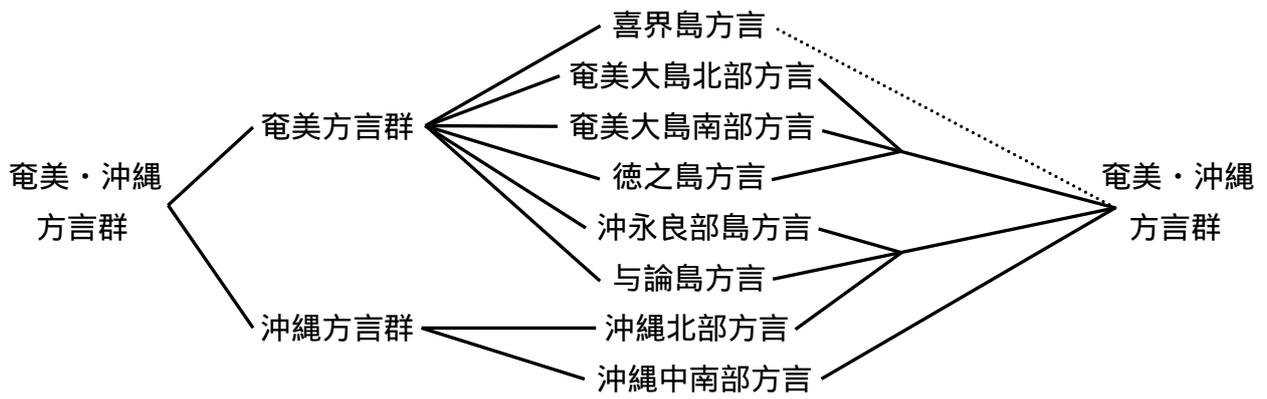


図3 喜界島方言の系統
 (左：春日(1974: 96-97) / 右：上村(1972: 20) 方言名一部改)

以下に参考として奄美・沖縄方言群に属する方言が話される地域の地図を示す。



図4 奄美・沖縄方言群が話される地域

2 上嘉鉄方言の談話資料

本節で記述する談話は、2010年9月に収録された上嘉鉄在住の70代の話者Hと20代の話者Nの会話の一部である。Hは主に上嘉鉄方言、Nは喜界島共通語を使用している¹⁴。Hが自身の戦争体験について語り、Nがそれをインタビュアーとして聞いている。

Hの発話について、一行目に本稿が採用している表記法による音韻表記、二行目に形態素境界、三行目に形態素ごとのグロス、四行目に日本語訳を記している。二行目は、音韻的条件による異形態の交替があるものについては基底形を書いている¹⁵。三行目は形態素ごとで統一したグロスを付記しているので、当該文脈での用法と異なる場合がある。分節音の表記については3.1.1.3、グロスの略記については巻末で述べる。

なお、(…)は聞き取り不能箇所である。また人名を[A]、[B]、[C]と表記している。

[1] N: 戦争時代なんかは覚えてるの？

[2] H: sensoozidai ubion doo.
 sensoozidai ubi-on =doo
 戦争時代 覚える-CONT.NPST SFP
 戦争時代覚えているよ。

[3] N: ここの防空壕行ったり？

[4] H: in.
 in
 RESP
 うん。

[5] umakaci yamakaci hakkitari yaa.
 uma-kaci yama-kaci hakkir-tari =yaa
 そこ-ALL 山-ALL 隠れる-たり SFP
 そこに山に隠れたりね。

¹⁴ Nは上嘉鉄方言を流暢には話さないが、理解には問題なく、普段からHはNに上嘉鉄方言で話している。したがって、以下の談話資料は日常の会話方法と差異はない。

¹⁵ 補充法など、形態的条件で異形態の交替がある場合は、二行目にも一行目と同じ形態を書いている。よって、同一の形態素でも二行目で表記が異なる場合がある。

- [6] ahen sen¹⁶, anuu, harukaci ižaribaa,
 ahen sen anuu haru-kaci iža-ri-ba-ya
 CONJ DSC 畑-ALL 行く.PST-COND-TOP
 そうして、畑に行ったら
- [7] wantu neesantu harukaci ižaribaa,
 wan-tu neesan-tu haru-kaci iža-ri-ba-ya
 1-COM 姉さん-COM 畑-ALL 行く.PST-COND-TOP
 私と姉さんと畑に行ったら
- [8] hikookinu k'itakara, k'itakara sen,
 hikooki-nu k'ita-kara k'ita-kara s-en
 飛行機-GN/NM 北-ABL 北-ABL 来る-SEQ
 飛行機が北から、北から来て
- [9] ahen c'ariba, k'itakara sin munoo amerika ten
 ahen c'ariba k'ita-kara s-in mun-ya amerika =ten
 CONJ 北-ABL 来る-NPST FN-TOP PLN QUOT
 そしたら、北から来るのはアメリカと
- [10] wanoo umiootan wake.
 wan-ya umi-oor-tan wake
 1-TOP 思う-CONT-PST FN
 私は思っていたの。
- [11] en siriba minamikara sin munoo nyippon ten
 en siriba minami-kara s-in mun-ya nyippon =ten
 CONJ 南-ABL 来る-NPST FN-TOP PLN QUOT
 そうすると南から来るのは日本と思っていたの。
- [12] umiootan wake.
 umi-oor-tan wake
 思う-CONT-PST FN
 思っていたの。

¹⁶ 副詞「そう」 ahen (または en) + 動詞「する」の活用形など、文と文をつなぐ接続詞として文法化しているものがある (ex. ahen s-en (そう する-SEQ)、 ahen s-i-(ri)ba(-a) (そう する-NPST-COND(-TOP))、 ahen ca-ri-ba(-a) (そう する-PST-COND(-TOP))、 ahen s-in muno-o (そう する-NPST FN-TOP)、 ahen nar-en (そう COP-CSL))。ただし音韻的には複数の語からなるので分かち書きする。

- [13] umiootariba, naa k'itakara c'an munnu,
umi-oor-ta-riba naa k'ita-kara c'an mun-nu
思う-CONT-PST-COND DSC 北-ABL 来る.PST FN-GN/NM
思っていたら、北から来たのが
- [14] barabara ten k'izuu macen yaa
barabara =ten k'izuu mac-en =yaa
OMP QUOT 機銃 撒く-SEQ SFP
バラバラと機銃を撒いてね
- [15] ahen sen naa, hohoo taihen ten yen,
ahen sen naa hohoo taihen =ten y-en
CONJ DSC あらまあ 大変 QUOT 言う-SEQ
そして、あらまあ大変と言って
- [16] kundoo naa, mimi usukkien ahen sooren,
kundu-ya naa mimi usukki-en ahen s-oor-en
今度-TOP DSC 耳 押さえる-SEQ そう する-CONT-SEQ
今度は、耳を押えてそうしたまま
- [17] hateežen mogutan wake.
hatee-žen mogur-tan wake
畑-LOC 隠れる-PST FN
畑に隠れたの。
- [18] ahen c'aribaa yo, naa parapara ten žahoo.
ahen c'aribaa =yo naa parapara =ten ža-soo
CONJ SFP DSC OMP QUOT COP.NPST-MOD
そうしたらね、パラパラとなの。
- [19] naa parapara k'izuu macoohu žahoo.
naa parapara k'izuu mac-oo-su ža-soo
DSC OMP 機銃 撒く-CONT.NPST-MOD COP.NPST-MOD
パラパラ機銃を撒いているんだよ。
- [20] ahen sin munoo, naa amanaa harukara ahen sen urien naa
ahen sin munoo naa ama-naa haru-kara ahen sen uri-en naa
CONJ DSC あそこ-ABL 畑-ABL CONJ 降りる-SEQ DSC
そして、あそこから畑からそして降りて

- [21] yon'yoori uri-en sen, yamakaci hakkitariba,
yon'yoori uri-en s-en yama-kaci hakkir-ta-riba
ゆっくり 降りる-SEQ 来る-SEQ 山-ALL 隠れる-PST-COND
ゆっくり降りて来て、山に隠れたら
- [22] naa umi-žen, parapara son k'izuuya
naa umi-žen parapara s-on k'izuu-ya
DSC 海-LOC OMP する-CONT.NPST 機銃-TOP
海で、パラパラしている機銃は
- [23] uminu hunien utusan wake.
umi-nu huni-en utus-an wake
海-GM/NM 船-DAT/LOC 落とす-RES.NPST FN
海の船に落としたんだよ。
- [24] ahen sen, tanjaen hatamien syoogakkookaci,
ahen se-n tanja-en hatami-en syoogakkoo-kaci
CONJ 担架-DAT/LOC 担ぐ-SEQ 小学校-ALL
そして、担架で担いで小学校へ
- [25] naa aaciidanjuu naron karada yooba
naa aa+cii+danjuu nar-on karada =yooba
DSC 赤+血+団子 なる-CONT.NPST 体 ACC
血だらけになっている体を
- [26] tanjaen hatamien syoogakkookaci hakubeeizan doo.
tanja-en hatami-en syoogakkoo-kaci hakub-en+izan =doo
担架-DAT/LOC 担ぐ-SEQ 小学校-ALL 運ぶ-SEQ+行く.PST SFP
担架で担いで小学校へ運んでったよ。
- [27] N: そこで怪我した人なんかは上小¹⁷に？
- [28] H: kamisyookaci
kamisyoo-kaci
上小-ALL
上小へ

¹⁷ 上嘉鉄小学校のこと。

[29] N: もうそんなんしょっちゅうね?

[30] もう (...) 畑行ってるときに。

[31] H: in, hateekaci ižon dukiinyi,
in hatee-kaci iž-on dukii-nyi
RESP 畑-ALL 行く-CONT.NPST FN-LOC
うん、畑へ行っているときに

[32] anoo ura k'izuu barabara macen yo,
anoo ura k'izuu barabara mac-en =yo
DSC DSC 機銃 OMP 撒く-SEQ SFP
ほら機銃をバラバラ撒いてね

[33] ahen sin munoo wannaa mikakien
ahen sin munoo wan-naa mikaki-en
CONJ 1-EXCL 目がける-SEQ
そうして私たち目がけて

[34] anoo k'izuu ucon žara ten umiibaa,
anoo k'izuu uc-on ža-ra =ten umi-i-ba-ya
DSC 機銃 打つ-CONT.NPST COP-INFR QUOT 思う-NPST-COND-TOP
機銃を撃っているだろうと思ったら

[35] enoo araa uminu hunikaci sen,
en-ya ar-aa umi-nu huni-kaci s-en
そう-TOP COP-NEG 海-GN/NM 船-ALL 来る-SEQ
そうではなくて海の船へ来て

[36] N: 海の船?

[37] H: un huninu c'uncaaya, nuu ka gunžin žara yaa.
un huni-nu c'u-ncaa-ya nuu =ka gunžin ža-ra =yaa
その 船-GM/NM 人-PL-TOP 何 DUB 軍人 COP-INFR SFP
その船の人たちは、何か軍人だろうね。

- [38] un c'uncaanu naa,
 un c'u-ncaa-nu naa
 その人-PL-GM/NM DSC
 その人たちが
- [39] tanŋaen syoogakkookaci nanžuunyunmu žan mun.
 tanŋa-en syoogakkoo-kaci nanžuunyun-mu žan mun
 担架-DAT/LOC 小学校-ALL 何十人-も COP.NPST FN
 担架で小学校へ何十人もだもの。
- [40] in, hakuben icikata sen,
 in hakub-en ic-i+kata s-en
 RESP 運ぶ-SEQ 行く-NML+FN する-SEQ
 そう、運んで行って
- [41] N: 怖いね。
- [42] H: in, ahen sen, higasikara,
 in ahen sen higasi-kara
 RESP CONJ 東-ABL
 うん、そして、東から
- [43] bakudan utuhen ka k'izuu ka nuu ka wakaran kedo,
 bakudan utus-en =ka k'izuu=ka nuu =ka wakar-an =kedo
 爆弾 落とす-SEQ DUB 機銃 DUB 何 DUB 分かる-NEG AC
 爆弾落としたか機銃か何か分からないけど
- [44] ippai meeen yo.
 ippai mee-en =yo
 いっぱい 燃える-SEQ SFP
 いっぱい燃えたよ。
- [45] uhužookara meetan munnu, syoogakkoomadi meeen,
 uhužoo-kara meer-tan mun-nu syoogakkoo-madi mee-en
 PLN-ABL 燃える-PST FN-GM/NM 小学校-LMT 燃える-SEQ
 ウフジョー（東の集落）から燃えたのが、小学校まで燃えて

- [46] zutto naa, wannaa yamažen hakkiooriba,
 zutto naa, wan-naa yama-žen hakki-oo-riba
 ずっと DSC 1-EXCL 山-LOC 隠れる-CONT.NPST-COND
 ずっと、私たち山で隠れていると
- [47] umanaa kundoo naa ura uri yooba, k'aži yooba mirikata.
 uma-naa kundu-ya naa ura uri =yooba k'aži =yooba mir-i+kata
 そこ-ABL 今度-TOP DSC DSC それ ACC 火事 ACC 見る-NML+FN
 そこから今度はほらそれを、火事を見ていた。
- [48] in, mirooren, naa mirooren yakahikata.
 in, mir-oor-en naa mir-oor-en yak-as-i+kata
 RESP 見る-CONT-SEQ DSC 見る-CONT-SEQ 焼く-CAUS-NML+FN
 うん、見ながら、見ながら焼けて行くのにまかせていた。
- [49] ženbu, syoogakkookara, in,
 ženbu syoogakkoo-kara in,
 全部 小学校-ABL RESP
 全部、小学校から、うん
- [50] higasinu syuurakukara syoogakkoomadi yakiti.
 higasi-nu syuuraku-kara syoogakkoo-madi yakir-ti
 東-NM/GM 集落-ABL 小学校-LMT 焼ける-PST
 東の集落から小学校まで焼けた。
- [51] en naren,
 en naren
 CONJ
 だから
- [52] N: 何歳のころ？
- [53] H: syoowanyižuunen naren anoo gonensee atara, ten umi-en,
 syoowanyižuunen nar-en anoo gonensee ar-ta-ra =ten umi-en
 昭和二十年 COP-CSL DSC 五年生 COP-PST-INFR QUOT 思う-SEQ
 昭和二十年だから五年生だったろう、と思って
- [54] N: 小学校？

- [55] H: syoogakkoo, yonen ka gonen ka.
 syoogakkoo yonen =ka gonen =ka
 小学校 四年 DUB 五年 DUB
 小学校、四年か五年か。
- [56] wannu [A] hanyiibaa,
 wan-nu [A] hanyi-i-ba-ya
 1-GM/NM PSN 背負う-NPST-COND-TOP
 私が[A]を背負うと
- [57] hanyien, yamakaci nuburi-baa,
 hanyi-en yama-kaci nubur-i-ba-ya
 背負う-SEQ 山-ALL 登る-NPST-COND-TOP
 背負って、山へ登ったら
- [58] kaaminenu yamakaci nubutan wake yo.
 kaamine-nu yama-kaci nubur-tan wake =yo
 PLN-GM/NM 山-ALL 登る-PST FN SFP
 川嶺の山へ登ったのよ。
- [59] naa k'uusyuu, uma binaran ten, yamakaci nuburiba,
 naa k'uusyuu uma binar-an =ten yama-kaci nubur-i-ba
 DSC 空襲 そこ 大丈夫だ-NEG QUOT 山-ALL 登る-NPST-COND
 空襲、ここだめだって、山へ登ると
- [60] ame ippai hurin wake.
 ame ippai hur-in wake
 雨 たくさん 降る-NPST FN
 雨たくさん降っているの。
- [61] en sibaa k'a, ura gonen narin k'a (...)
 en sibaa k'a ura gonen nar-in k'a
 CONJ 子 DSC 五年 なる-NPST 子
 そしたら 子ども、ほら五年になる子ども
- [62] nansai ka.
 nansai =ka.
 何歳 DUB
 何歳かな。

[63] sansai ka narin k'a hannyen,
 sansai =ka nar-in k'a hannyi-en
 何歳 DUB なる-NPST 子 背負う-SEQ
 三歳かになる子を背負って

[64] N: 弟？

[65] H: A, hannyen, yamanuburi c'aribaa, hinnyakara,
 A hannyi-en yama-nuburi c'a-riba-ya hinnya-kara
 PSN 背負って 山-登り する.PST-COND-TOP みんな-ABL
 [A]、背負って、山登りしたら、みんなから

[66] inahan munži,
 ina-san munži
 小さい-NPST CMPR
 小さいのに

[67] gonen, ura yonen, ee sannen, iya inaha.
 gonen ura yonen ee sannen iya ina-sa
 五年 DSC 四年 DSC 三年 DSC 小さい-NPST
 5年、ほら4年、3年、いや小さい。

[68] sansai ka yonsai kanu narin k'a yooba hannyen,
 sansai =ka yonsai =ka-nu nar-in k'a =yooba hannyi-en
 三歳 DUB 四歳 DUB-GM/NM なる-NPST 子 ACC 背負う-SEQ
 三歳か四歳かになる子を背負って

[69] yamakaci nubutan ten yen yo,
 yama-kaci nubur-tan =ten y-en =yo
 山-ALL 登る-PST QUOT 言う-SEQ SFP
 山に登ったって言ってね

[70] ippai yo, humirattan doo.
 ippai =yo humir-ar-tan =doo
 いっぱい SFP 褒める-PASS-PST SFP
 すごく褒められたのよ。

[71] in, uyancaakara, in.
in, uya-ncaa-kara in
RESP 親-PL-ABL RESP
うん、親たちから、うん。

[72] N: 川嶺まで歩いて行ったの？

[73] H: kaaminemadee accen yo.
kaamine-madi-ya acc-en =yo
PLN-LMT-TOP 歩く-SEQ SFP
川嶺までは歩いたよ。

[74] ahen sen (...)
ahen s-en
CONJ
そして

[75] amee ippai hurooribaa,
ami-ya ippai hur-oo-riba-ya
雨-TOP 一杯 降る-CONT.NPST-COND-TOP
雨はたくさん降っているし

[76] midunu saasaa nagarion dookara
midu-nu saasaa nagari-on doo-kara
水-GM/NM OMP 流れる-CONT.NPST FN-ABL
水がサーサー流れているところから

[77] accoohu žahoo.
acc-oo-su ža-soo
歩く-CONT.NPST-MOD COP.NPST-MOD
歩いているんだよ。

[78] ahen sen, en naren, k'uusyuu ura wacaa
ahen s-en en naren k'uusyuu ura wa-caa
CONJ CONJ 空襲 DSC 1-INCL
そして、だから、空襲ほら私たち

[79] sensooya naa nyidutu siran yoonyi ten,
 sensoo-ya naa nyidu-tu sir-an yoo-nyi =ten
 戦争-TOP DSC 二度-COM する-NEG FN-LOC QUOT
 戦争は二度としないようにと、本当に子供たちまでも

[80] huntoonyi k'ancaakatimu,
 huntoo-nyi k'a-ncaa-katimu
 本当-LOC 子-PL-までも
 本当に子供たちまでも

[81] un koto yooba yaaen yen cikahon doo.
 un koto =yooba yaa-en y-en cik-as-on =doo
 その FN ACC 家-DAT/LOC 言う-SEQ 聞く-CAUS-CONT.NPST SFP
 そのことを家で言って聞かせているよ。

[82] N: [B]なんか、[C]なんか？

[83] H: ahen y-on.
 ahen y-on
 そう 言う-CONT.NPST
 そう言っている。

[84] naa [B]ya c'un yaanu k'a narihu žan-ga,
 naa [B]-ya c'u-nu yaa-nu k'a nar-i-su žan-ga
 DSC PSN-TOP 人-GN/NM 家-GN/NM 子 COP-NPST-MOD COP.NPST-AC
 [B]は人の家の子だけど

[85] [C]-enoo itumu ahen c'an kutu yooba
 [C]-en-ya itumu ahen c'an kutu =yooba
 PSN-DAT/LOC-TOP いつも ADN FN ACC
 [C]にはいつもそうしたことを

[86] yen cikahon ten.
 y-en cik-as-on =ten.
 言う-SEQ 聞く-CAUS-CONT.NPST QUOT
 言って聞かせているよ。

3 上嘉鉄方言の簡易文法

本節では談話資料の理解のための補助的資料として簡易文法を示す。以下 3.1 で音韻面、3.2 で形態統語面の記述を行う。

3.1 上嘉鉄方言の音韻特徴

3.1.1 分節的音韻特徴

以下では、音素目録と異音、音素の交替、音節構造について述べた上、本稿で暫定的に採用している表記法について説明する。

3.1.1.1 音素目録と異音

- 音素目録

以下表 2 に音素目録を示す。[] 内の ~ は自由異音をしめしている（条件異音に関しては後述）。() に入れた音素は分布に著しい偏りが見られるものである。

表 2 上嘉鉄方言の音素目録

子音	閉鎖音	(p), b	t ^h , t ^ʰ [t ^ʰ ~ t], d	k ^h , k ^ʰ [k ^ʰ ~ k], g
	破擦音		(ts), tɕ ^ʰ [tɕ ^ʰ ~ tɕ]	
	摩擦音		s, (z [z ~ dz]), ʒ [ʒ ~ dz]	h
	鼻音	m	n	ŋ
	弾音		r	
	接近音			j [j ~ ʒ] w [w ~ ʍ]
	原音素	T, K, Q, N		
母音	短母音		i	u ¹⁸
			e	o
			a	
	長母音		i:	u:
			e:	o:
		a:		

- 分布に偏りのある音素

/p/, /z/, /ts/ は借用語のみに見られる（ex. iQpai [ip^ʰp^ʰai] 「一杯」、zuQTo [dzut^ʰt^ʰo] 「ずっと」）。

また、/e/, /o/ は借用語と接辞以外では語例が少ない。

/ŋ/ の分布は語中の音節末の鼻音の後に限られる（なお音節末の鼻音の後の閉鎖音 /g/ の分布は hiNgu [çiŋgu] 「垢」の一例しか見つかっていない）。

¹⁸ u は円唇性が弱く若干中舌化する。長母音も同様である。

- 喉頭化音 (C^ʔ)

奄美・沖縄方言群に属する方言の多く、及び与那国方言は、語頭の無声閉鎖音（及び破擦音）に、喉頭化 / 非喉頭化の対立がある¹⁹。喉頭化音の音価は方言によって異なり、与那国方言のように喉頭の強い緊張を伴う方言もあれば、喉頭化子音に対応する子音が無気音で、非喉頭化音に対応する子音が有気音で実現し、VOT の差が主な弁別特徴となっている方言もある（Thomas Pellard (p.c.)）。上嘉鉄方言においても語頭の無声閉鎖（破擦）音が喉頭の緊張の有無ではなく主に無気 / 帯気によって対立しているが、琉球語全般において喉頭化音 / 非喉頭化という呼称が定着していることを踏まえ、本稿では暫定的に無気音を喉頭化音、有気音を非喉頭化音と呼ぶ。またこの喉頭化音を C^ʔ で示して非喉頭化音と区別する。喉頭化音は喉頭の緊張を伴ったり、閉鎖の時間が長くなる場合がある。またこの対立は語中及び接語初頭では失われる。音声的には喉頭化（無気）音として実現する。

- 環境異音、[j] 挿入と原音素

以下では異音の見られる環境について詳述する。

/g/ は語頭では [g]、語中ではそれ以外では [g] もしくは [ɣ] で実現する（ex. gama [gama] 「穴」、nagion [naɣion]）。

/g/ → [g] / #_
[g ~ ɣ] / elsewhere

/s/ は /j/, /i/, /i:/ の前で [ç]、/e/, /e:/ の前では [ç] もしくは [s]、それ以外では [s] で実現する（ex. si: [çi:] 「する」、seN [seN] ~ [çeN] 「来て」）。

/s/ → [ç] / _j, i, i:
[ç] / _e, e: (optional)
[s] / elsewhere

/h/ は /j/, /i/, /i:/ の前では [ç]、/u/, /u:/ の前では [h] もしくは [φ]、それ以外では、[h] で実現する。

/h/ → [ç] / _j, i, i:
[φ] / _u, u: (optional)
[h] / elsewhere

/n/ は /j/ の前で [ɲ] で実現する（ex. uNnjuQKa: [uɲɲuk^ʔk^ʔa:] 「帯」）。

/n/ → [ɲ] / _j

¹⁹ これは、歴史的変化（語頭の喉頭化）によると考えられており、その変化の条件として、狭母音 i, u の前（ただし、e i 及び o u という変化の起きる前に喉頭化した。ex. t^ʰura < *tura 「顔、面」 cf. t^hura < *tora 「虎、寅」）、日本語東京方言の hi, hu に対応する音節が脱落した場合（ex. t^ʰari 「二人」）が指摘されている（上村 1972 など、ただし例は上嘉鉄方言から）。

/e/, /e:/ は語頭では [j] を生じそれぞれ [je], [je:] で実現する²⁰ (ex. eKi [jek²i] 「駅」、e:go [je:go] 「英語」)。また、母音に続くとき、随意的に [j] が挿入される (ex. jama-eN [jamaeN] ~ [jamajen] 「山で」、me:-eN [me::N] ~ [me:jeN] 「燃えて」)。

→ [j] / #_ e, e:
[j] / V_ e, e: (optional)

上述のように、無声閉鎖 /t^h/, /t^ʰ/, /k^h/, /k^ʰ/ は、語中及び接語初頭では喉頭化（無気）/非喉頭化（帯気）の区別が中和しており、常に喉頭化音（無気音）で実現するため、原音素 /T/ [t^ʰ ~ t], /K/ [k^ʰ ~ k] を立てる（なお、歯茎硬口蓋破擦音には喉頭化音 /tɕ^ʰ/ しかなく、また /p/ も語中では喉頭化音（無気音）として実現する）。さらに無声閉鎖音 /p/, /T/, /K/ は音節末では調音位置も中和するため、原音素 /Q/ を立てる。/Q/ は音声的には後続子音に同化する。また、音節末では鼻音 /m/, /n/, /ŋ/ も後続子音と調音位置が同化して [m ~ n ~ ŋ] で実現し、文末あるいは母音が続くときは [N ~ Ṽ] で実現する。このため音節末鼻音に原音素 /N/ を立てる。

● 音素の交替²¹

表3のように /h/ と随意的に交替する /s/ が一部の接辞・語幹末にみられる。

表3 /s/と/h/の交替

	基底形	交替形	語例
具格接辞	-seN	-heN	de:-heN 「竹で」
名詞化/ムード接辞	-su	-hu	aQK-ar-aN-hu za-ho: 「歩けないんだよ」
動词语幹末	...s-	...h-	utuh-aN 「落とさない」
形容詞接辞	-sa...	-ha...	ina-haN 「小さい」

3.1.1.2 音節構造と拍

音節構造は (C₁)(j)V(t)(C₂) である。C₂ には /Q/ と /N/ のみが分布し語末の C₂ は /N/ のみである。借用語を除いては、/j/ の前の C₁ には /n/ しか分布しない。

短母音 V は 1 拍、音節末子音 C₂ は 1 拍、長母音 V: は 2 拍を成す。

多くの語は 2 拍以上の長さを持つ²² が、若干の 1 拍語がある (ex. ma 「馬」、t^ʰa 「蓋」、tɕ^ʰi 「した」、tɕ^ʰu 「人」、sa 「草」、sa 「足」、k^ʰa 「子」、ju 「魚」、ji 「言え」)。

1 拍語が単独で発音された場合、子音が長くなったり、音節末に声門閉鎖を伴ったりする (ex. ma [ma] ~ [m^ʰa] ~ [maʔ] ~ [m^ʰaʔ] 「馬」)。

²⁰ ただし、aheN [aheN] 「そう」の語頭の分節音が脱落した eN は [j] が挿入されず [ʔeN] と発音される。

²¹ このほかに話者によって軟口蓋閉鎖音が /i/ の前で歯茎硬口蓋破擦音と交替する場合がある。(ex. duKi: ~ dutɕ^ʰi: 「とき」)

²² 琉球語の諸方言全般においてそうであるように、日本語（東京方言）の 1 モーラ語の同源語の多くは上嘉鉄方言で長母音を持つ 2 モーラ語になっている (ex. mi: 「目」 hi: 「木」)。

3.1.1.3 表記法

本稿では表記の簡便のため暫定的に定めた表記法を用いる。以下に音素表記と表記が異なるものについて対応を記す。語を単位に分かち書きしている。

/t^h/= t, /tʰ/= tʰ, /k^h/= k, /kʰ/= kʰ, /g/= g, /tɕʰ/ (語頭) = cʰ, /z/= ž, /r/= r, /j/= y, /T/= t, /tɕʰ/ (語中) c,
/K/= k, /Q/= p ~ t ~ k ~ c (後続子音と同じ子音を書く)、/N/= n, /i:/= ii, /e:/= ee, /a:/= aa, /o:/= oo, /u:/= uu

また、語中で音節末の /N/ に /j/ もしくは母音が続く場合は、音節初頭の /n/ と区別するため、音節境界に ' を挿入する (ex. min'yoo /miNjo:/ [miŋjo:] 「民謡」)。

3.1.2 超分節的音韻特徴 (アクセント)

本項では上嘉鉄方言のアクセントについて概略的に記述する²³。

3.1.2.1 アクセント実現

上嘉鉄方言は語彙的に指定された二つのアクセント型を弁別するアクセント体系を持つ (松森 1991 など)。本稿では上野 (1991) 及び松森 (1991) にならい、この二つのアクセント型を A 型 / B 型と呼ぶ。アクセント型は H / L 二つの音調の配列パターンとして記述できる。それぞれの音調を担う単位は基本的には拍であるが、/Q/ は音調を担わない²⁴。

次頁表 4 に名詞の例を挙げる。「...」は文中での、それ以外は一音韻語²⁵のみを発した場合の音調である。上嘉鉄方言において、A / B 二つのアクセント型は LH のメロディが付与される位置で弁別されていると解釈できる。表中ではこの LH に下線を引いている。基本的に A 型は音韻語の長さで、B 型は語幹の拍数で LH の付与位置が決まる。すなわち、A 型は音韻語末、B 型は (名詞の場合) 語幹の次々末拍から次末拍に渡って LH が現れる (B 型 2 拍名詞で L が現れていないのは、音調を担う拍が存在しないためと解釈する)。なお、B 型の一音韻語単独の場合の語末の L は境界音調と解釈する。

²³ 先行研究として松森 (1991) は名詞及び名詞 + 1 拍接辞のアクセント、上野ほか (1994) は動詞の通常相と継続相 (本稿ではそれぞれ非過去形 / 継続非過去形と呼ぶものに相当する) のアクセントを記述し、一般化および理論的分析を行っている。しかし、ともに喜界島諸方言間の相違に主眼がおかれており、一方内でのアクセント体系の記述を意図したものではないので詳述しない。なお本稿の記述及び一般化は、先行研究の提示したデータをカバーするものである。

²⁴ よって /Q/ を一つ含む語は 1 拍短い語と同じ音調パターンになる (ex. A 型 uttu (LH) 「弟、妹、後輩」、cf. A 型 midu (LH) 「水」)。なお /N/ は音調を担う (ex. B 型 anmaa (HLHL) 「お母さん」)。

²⁵ 本稿では、アクセント付与の単位となるものを一音韻語と呼ぶ。一音韻語内で LH のメロディが二回以上現れることはない。

表 4 名詞 A 型のアクセント

型	拍数	1	2	3	4
	語例	k'a	midu	uduri	aatuci
	語形	「子」	「水」	「踊り」	「暁」
A	X	—	<u>LH</u>	<u>HLH</u>	<u>HHLH</u>
	X...	—	<u>LH</u>	<u>HLH</u>	<u>HHLH</u>
	X-nu/X-mu	<u>L-H</u>	<u>HL-H</u>	<u>HHL-H</u>	<u>HHHL-H</u>
	X-nu.../X-mu...	<u>L-H</u>	<u>HL-H</u>	<u>HHL-H</u>	<u>HHHL-H</u>
	語例	該当語彙なし ²⁶	umi 「海」	hatana 「刀」	meerabi 「乙女」
	語形				
B	X	—	<u>HL</u>	<u>LHL</u>	<u>HLHL</u>
	X...	—	<u>HH</u>	<u>LHH</u>	<u>HLHH</u>
	X-nu/X-mu	—	<u>HH-L</u>	<u>LHH-L</u>	<u>HLHH-L</u>
	X-nu.../X-mu...	—	<u>HH-H</u>	<u>LHH-H</u>	<u>HLHH-H</u>

以下表 5 に名詞で接辞が複数後接した場合及び動詞・形容詞の場合の音調配列を示す。まず表 5 の名詞の場合に注目する。A 型では特定の分節音に LH が固定されておらず、接辞付与に伴って音韻語末に LH が移動していく。一方 B 型では、接辞を付与しても語幹に結びついた LH が動かない。このように、接辞が複数後接した場合も基本的に前述の一般化が成り立つ。次に、動詞・形容詞の場合も基本的には音韻語末に LH が現れる型と語幹の拍数から LH の位置が決まる型の二型体系である。よって本稿では動詞・形容詞にも A 型 / B 型という呼び名を用いて型を区別する。B 型の LH のメロディは、動詞の場合語幹末から直後の接辞初頭、形容詞では語幹の次末拍から語末拍に渡って出現する。

表 5 名詞・動詞・形容詞のアクセント

型	名詞	動詞	形容詞
A	鹿兒島-LOC kagosima-žen HHHH- <u>LH</u>	飛ぶ-NEG tub-an H- <u>LH</u>	甘い-NPST ama-sa HL- <u>H</u>
	鹿兒島-LOC-TOP kagosima-ženo-o... HHHH- <u>HL-H</u>	飛ぶ-NEG-PST tub-an-ti H- <u>HLH</u>	甘い-NPST ama-sari HH- <u>LH</u>
B	大阪-LOC oosaka-žen... HL <u>HH</u> -HH	取る-NEG tur-an <u>L</u> - <u>HL</u>	白い-NPST siru-sa <u>LH</u> -L
	大阪-LOC-TOP oosaka-ženo-o... HL <u>HH</u> -HH-H	取る-NEG-PST tur-an-ti <u>L</u> - <u>HH</u> -L	白い-NPST siru-sari <u>LH</u> -HL

²⁶ 1拍名詞に B 型がないことは、湾方言・中里方言・荒木方言について上野(2000)が指摘している。

以上のように A 型の語幹からなる音韻語は基本的に音韻語末に LH が付与されるが、特定の接辞が後接した場合、音韻語末と異なる位置に LH のメロディが付与される。本稿では、このような特徴を持つ接辞を B 型接辞と呼ぶ（一方、これまで見たように A 型語幹に後接して音韻語末に LH を持つ語を作る接辞を A 型接辞と呼ぶ）。名詞接辞では -en, -žen, -sen 以外の 2 拍接辞（-kara, -madi など）、動詞では否定接辞-aa 以外で長母音を含む 2 拍の定動詞接辞（意思接辞 -oo、推量接辞 -roo など）や継続 / 結果接辞が B 型接辞に含まれる。表 6 に B 型接辞が後接した例を示す。B 型接辞が A 型語幹に後接した場合、B 型接辞の次々末拍から次末拍に渡って LH が現れ、さらに接辞が後接しても基本的には LH の位置は移動しない²⁷。一方 B 型接辞が B 型語幹に後接した場合は、A 型接辞が後接した場合と同様に、語幹に結びついた LH の位置は変わらない。

表 6 名詞・動詞・形容詞のアクセント（B 型接辞）

型	名詞	動詞	形容詞
A	踊り-ABL uduri-kara...	飛ぶ-CONT.NPST tub-oori	甘い-NPST-INFR ama-sa-roo
	HHL- <u>HH</u>	H- <u>LHL</u>	HH- <u>L</u> -HH
	踊り-ABL-も uduri-kara-mu...	飛ぶ-CONT.NPST-COND tub-oori-ba...	
	HHL- <u>HH</u> -H	H- <u>LHH</u> -H	
B	刀-INST hatana-kara...	取る-CONT.NPST tur-oori	白い-NPST-INFR siru-sa-roo
	<u>LHH</u> -HH	<u>L</u> - <u>HHL</u>	<u>LH</u> -H-HH
	刀-INST-も hatana-kara-mu...	取る-CONT.NPST-COND tur-oori-ba...	
	<u>LHH</u> -HH-H	<u>L</u> - <u>HHH</u> -H	

3.1.2.2 アクセント分析

以上のアクセント実現から、アクセント型の弁別に関わる LH の出現位置について以下 a, b, c、LH のメロディが付与されない拍の音調について、以下 d, e のような仮定ができる。

- 音韻語末が LH のメロディのデフォルトの位置である。
- 一音韻語内に B 型語幹 / 接辞が含まれる場合、これに LH が結びつく。
- 一音韻語内に B 型語幹 / 接辞が含まれない場合、LH はデフォルトの位置に結びつく。
- H がデフォルトの音調である。
- LH のメロディが付与されない拍には境界音調 L がデフォルトの音調が結びつく。

²⁷ ただし、A 型名詞語幹（1 拍）-B 型接辞の場合、及び A 型名詞語幹（2, 3 拍）-B 型接辞-A 型接辞の場合で、音韻語末に LH が現れることがある（ex. k'a-kara (LHL ~ HLH) midu-kara-mu (HL-HH-L ~ HH-HL-H)）。

これを踏まえ、以下に自律分節音韻論²⁸に基づくアクセント派生規則を示す。

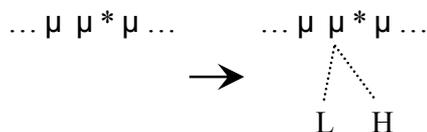
アクセント派生規則

0. 規則の適用方法

以下の規則は 1, 2, 3, 4, 5 の順で適用する。規則が適用されても結合する拍が存在しない場合、その音調は浮遊音調 (floating tone) となり、浮遊音調結合規則が適用されない限り実現しない。なお、以下では音韻語末 / 音韻句²⁹ 末をそれぞれ # /] で示す。

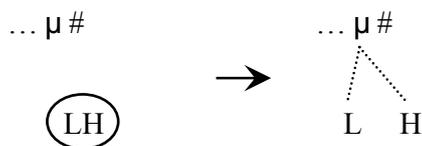
1. LH 付与規則

一音韻語の中で語頭に近い B 型語彙の指定された拍に LH を付与する。指定された拍とは名詞語幹と接辞は次末拍、動词语幹は直後の接辞初頭、形容词语幹は語幹末である。



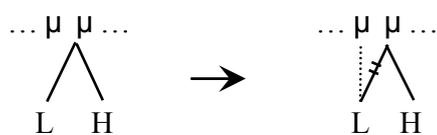
2. 浮遊 LH 結合規則

浮遊音調を語末拍に結びつける (浮遊音調を で囲んで示す)。



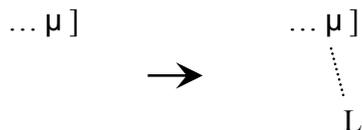
3. LH 単純化規則

一つの拍に結びついた LH のうち、L の対応線を断線し、1 つ前の拍に結びつける。



4. 境界音調 (L) 付与

音韻句末に L が付与される。ただし、音調が指定されていない拍にのみ適用される。



²⁸ Goldsmith (1979)・原口 (1979) など。ただし Pulleyblank (1986)・松森 (1989) に従い、基本音調メロディを仮定しない。

²⁹ 本稿では、境界音調が付与される単位を一音韻句と呼ぶ。一音韻語と等しいかより大きな音韻論上の単位であり、文と等しいかそれより小さい。

5. デフォルト音調 (H) 付与

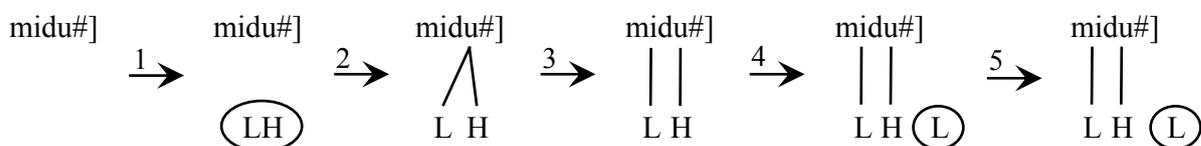
音調が指定されていない拍に H が付与される。

以上のうち、規則 2 は A型語幹 / 接辞のみからなる音韻語の場合、音韻語末に LH が現れることから立てている規則である。また、規則 0 と規則 3 により B型の 2 拍名詞語幹で H の前に L が現れないことを説明している (すなわち規則 3 の「1つ前の拍に結びつけ」られない L は浮遊するが、これを結合する規則は存在しないため、規則 0 により L は実現しない)。また、A型語幹 / 接辞のみからなる音韻語で境界音調が現れないことは、規則 2 と 4 から説明される (すなわち規則 2 で語末に LH が付与されるため境界音調 L は結びつかない)。

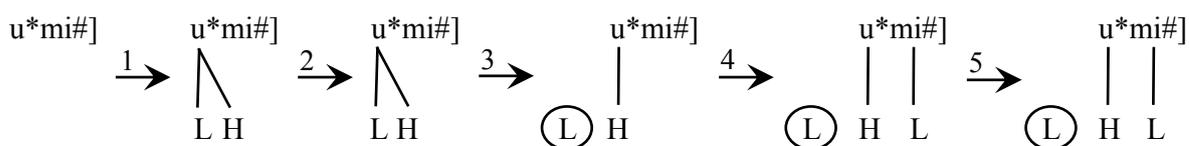
最初に結びつく音調を L でなく LH としたのは、L が結びつくとは仮定すると以下 2 点の問題が生じるからである。まず、B型名詞で語幹の次々末拍に L が結びつくとは仮定すると、2 拍 B型名詞で音調が結びつく拍が存在せず浮遊してしまい、2 拍名詞で A型 / B型の区別がないことを予測してしまう。次に A型語幹 / 接辞からなる語で音韻語の次末拍に L が結びつくとは仮定すると、音韻語末は音調が指定されていないため、境界音調の L が結びつくことを予測してしまう。

以下にアクセント派生の例をいくつか示す。

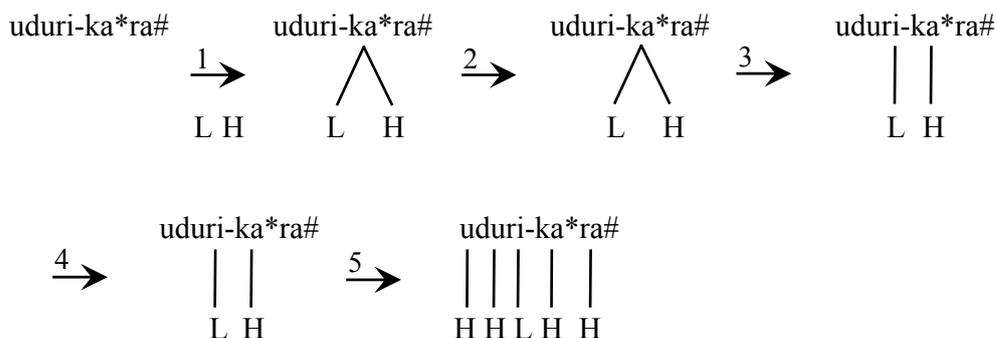
ex.) A型 2 拍名詞 midu (LH)



B型 2 拍名詞 umi (HL)



A型 3 拍名詞-B型 2 拍接辞 uduri-kara... (HHLHH)



3.2 上嘉鉄方言の形態統語論的特徴

膠着語であり、接尾辞付与による形態法が主である。しかし、一部の動詞は複数の語幹を持ち、接辞の選択と同様に語幹の選択が動詞の機能を決定づけるのに重要な役割を果たしている（歴史的には、すべての動詞が語幹を一つだけ持つ体系から、音変化、語幹と接辞の融合及びパラダイムの水平化により、現在の体系に変化したと考えられる）。名詞に比べ動詞の方が複雑な内部構造を持つ。SOV 語順、従属部標示型である。本稿では主な品詞分類として名詞・動詞・形容詞・副詞・連体詞・助詞・間投詞を立てる。

3.2.0 語の認定³⁰

本稿では、語の認定はアクセントによっている。アクセント付与の単位となる一音韻語と形態論上の語を別個に認める根拠はないと考えるからである。拘束形態素のうち、前述の A 型語幹に後接して LH のメロディの実現位置を変えないものは接語として、変えることがあるものは接辞として扱う³¹。

- ex.) midu (水) miduen 「水に」 → [midu-en] 一音韻語。 en は接辞。
LH HHLH
midu 「水」 miduten 「水と」 → [midu]=[ten] 二音韻語。 ten は接語。
LH LHLH

3.2.1 名詞形態論

名詞は接辞・接語を伴って動詞の項となり、コピュラ（後述）や文末助詞を伴って述語になる。また単独で述部となる場合もある。また動詞・形容詞の特定の語形、名詞の連体・属格形及び連体詞³²によって修飾されうる。以下名詞に後接する接辞・接語及び名詞のうち代名詞・指示詞・疑問詞など閉じたクラスについて述べる。（疑問詞・指示詞で副詞的なもの等についてもここで述べる。）

3.2.1.1 名詞接辞・助詞

代名詞のみに後接する接辞（主格（及び属格）の -ŋa 等）については次項で述べる。

³⁰ 原則としてここで紹介した方針に従っているが、データ不足のため暫定的に認定した部分がある。

³¹ ただし、動詞・形容詞は語幹のみでは現れないため、語幹に直接つくものは接辞と考える。

³² 名詞を修飾する機能を持ち、名詞の前だけに分布する語について連体詞という範疇を立てこれに分類する。ahon, ohon 「あんな、そんな」 saason 「どんな」 ahen c'an 「そうした」（副詞と動詞「する」の過去連体形が文法化したもの）などがある。

● 複数・例示

複数接辞には -taa, -ncaa がある。普通名詞では人間を表す名詞にしか後接できない³³。また原則として一方を後接できる名詞は他方を後接できない³⁴ (ex. nyii-taa 「兄たち」、k'a-ncaa 「子どもたち」)。

例示を表す接辞として -nca がある。語末が長母音の名詞に -nca が後接するとき、接辞境界の前の長母音は短くなる (ex. saa 「お茶」 sa-nca 「お茶やら」)。

● その他の接辞・接語

ここでは、主に名詞に後接し、格や情報構造を表す接辞・接語について述べる。以下表 7 に語形と機能を挙げる。対格は通常接辞でマークされないが、=yooba, -oba でマークしてもよい。与格/処格接辞 -en には具格と同様の機能もある³⁵。状態述語の場合、場所を示す接辞には -en のみが用いられ、-žen は使えない。

表 7 名詞接辞・接語

	機能・日本語対訳		機能・日本語対訳
-nu	主格/属格「が/の」	-tu	共格「と」
=yooba, -oba	対格「を」	-kamu	比格「より」
-en	与格/処格「に」	-ya ³⁶	主題「は」
-nyi	処格「に」	-du	焦点
-žen	処格「で」	-mu	並列「も」
-sen	具格「で」	-seeka ³⁷	「さえ」
-kara	奪格「から」	=beeri, =bakka(r)i	「ばかり」
-madi	限界格「まで」	-daki	「だけ」
-kaci	方向格「へ」		

³³ 形式名詞 mun に後接した an muncaa 「あいつら」等で動物を指すことはできる。

³⁴ 固有名詞、親族呼称や職階などには -taa が、それ以外には -ncaa が後接する。

³⁵ 与格接辞 -en には方向格の機能はない。

³⁶ 以下表 ii のように、主題の接辞 -ya が名詞に後接するとき名詞の語末音によって異形態を生じる。今のところ短母音の e, o で終わる名詞は見つかっていない。また、語末が母音連続の名詞に後接する場合は語末の短母音によって異形態が決まる (ex. kue-e (kui-ya) 「声は」)。

表 ii 主題接辞の異形態

名詞の語末音	異形態	語例 (基底形)	日本語対訳
V:	V:ya	soodee-ya (soodee-ya)	兄弟は
Vn	V.no:	okkano-o (okkan-ya)	お母さんは
a (...a: 以外)	a:	aca-a (aca-ya)	明日は
i (...i: 以外)	e:	hune-e (huni-ya)	船は
u (...u: 以外)	o:	udo-o (udu-ya)	布団は

³⁷ see という形式を許容する話者もいる。

3.2.1.2 名詞のうち閉じたクラスについて

本項では、代名詞・指示詞など、名詞のうち閉じたクラスについて表 8～11 に語形及び機能を記述する。名詞のうち閉じたクラスにも一般に前頁表 7 の接辞が後接するが、その他の名詞と共有しない接辞及び語形変化も見られるため、合わせて本項で記述する。

● 代名詞

naami は属格接辞によって属格が表示され、wan, da には属格専用の形式がある一方、duu 及び複数形は音形上の標示なく属格の機能を持ちうる (ex. wan-naa yaa 「私たちの家」)。

表 8 代名詞

	単数	単数属格	複数	複数属格
1 人称	wan	waa	wa-caa (包括) wan-naa (除外)	wa-caa (包括) wan-naa (除外)
2 人称	da	daa	dan-naa	dan-naa
2 人称 (敬称)	naami	naami-nu	naa-caa	naa-caa
再帰代名詞	duu	duu	duu-naa	duu-naa

● 指示詞

hu 系は近称に、u 系は近称と文脈指示に、a 系は遠称に用いられる。また指示詞は 3 人称代名詞の機能も兼ねている。場所の指示詞には独自の語形変化があり、与格 / 処格接辞 -en が後接する場合語幹末母音が脱落する。

表 9 指示詞

	hu 系	u 系	a 系
複数	huri	uri	ari
主格 / 属格	hun-naa	un-naa	an-naa
与格 / 処格	hun-ŋa	un-ŋa	an-ŋa
連体	hun'-en	un'-en	an'-en
場所	huma(a)	uma(a)	ama(a)

表 10 場所の指示詞の屈折

	近称	中称	遠称	どこ
与格 / 処格「に / で」	hum-en	um-en	am-en	žaa-en
奪格「から」	huma-naa	uma-naa	ama-naa	žaa-naa
限界格「まで」	huma-tuu	uma-tuu	ama-tuu	žaa-tuu
方向格「へ」	huma-i	uma-i	ama-i	ža-i
曖昧性「～あたり・～らへん」	huma-ndee	uma-ndee	ama-ndee	ža-ndee

- 疑問詞

表 11 疑問詞

何	nuu	誰	taru
いつ	itu	誰-主格	tan-ŋa
どこ	žaa	誰-与格 / 処格	tan'-en
いくつ	ikutu	誰-属格	taa
何人	ikutari	どれ	duru ~ diru
なぜ	nua ~ nuka	どれ-主格	dun-ŋa ~ din-ŋa
どんな	saahon	どれ-与格 / 処格	dun'-en ~ din'-en
どう	saahen	どれ-連体	dun ~ din
いくら・どれくらい	sansa		

3.2.2 動詞形態論

動詞は、語幹と接辞からなり、一般に単独で文の述部となりうる。一部の不規則動詞を除くと、動詞には語幹を一つだけ持つものと、語幹を二つ持ち、動詞接辞ごとに後接する語幹が決まっているものがある。以下では動詞の内部構造及び動詞周辺の構造について概観した後、定動詞 / 副動詞接辞の形態・用法、語幹の交替と接辞境界での形態音韻論的交替、その他の動詞接辞及び動詞に後接する接語（従属節を作る接辞・接語、定動詞接辞 / 接語、派生接辞）、動詞のサブカテゴリであるコピュラの形態・用法などについて述べる。

3.2.2.0 動詞の内部構造・動詞周辺の構造

本稿では、主節（及び単文）の主動詞として現れうるものを定動詞、定動詞に先行して副詞的に定動詞を修飾する動詞を作るものを副動詞と呼ぶ。動詞の内部構造は概ね以下のように一般化できる。丸括弧内は随意的要素である。また []-[]は、少なくとも一方のスロットは埋まっていなければならないことを示す。

表 11 動詞の内部構造

定動詞	語幹-(派生接辞)-[否定]-[テンス/ムード]
副動詞	語幹-(派生接辞)-副動詞接辞

定動詞は単独で、あるいは次頁図 5 のように接辞・助詞等を伴って従属節述語・主節（及び単文の）述語をなす。（定動詞に後接するコピュラは、接辞・助詞を伴って主節では主にモダリティを、従属節では主節事態と従属節事態の関係を示す。）

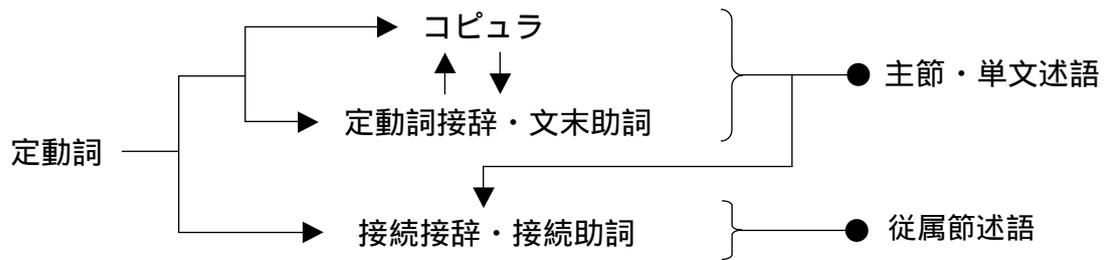


図5 動詞述語の構造

3.2.2.1 定動詞 / 副動詞接辞

以下表 13 に動詞 tub-「飛ぶ、跳ぶ」（及びデータの都合から tur-「取る」）を例に語幹に直接に後接する定動詞接辞・副動詞接辞の機能・形式・語例を示す。

表 13 定動詞 / 副動詞接辞

	機能	形式	語例	日本語対訳	備考
定動詞接辞	意思	-a/-oo	tub-a/tub-oo	飛ぼう	
	命令	-i	tub-i	飛べ	
	禁止	-una	tub-una	飛ぶな	
	否定	-aa	tub-aa	飛ばない	
	否定接続	-an	tub-an	飛ばない	
	非過去	-ii	tub-ii	飛ぶ	
	非過去連体	-in	tub-in	飛ぶ	
	過去	-ti	tu-di	飛んだ	灰色部分の接辞は否定接続形に後接して否定過去を表す形式を作る
	過去接続	-ta	tu-da	飛んだ	
	過去連体	-tan	tu-dan	飛んだ	
副動詞接辞	継起	-en	tub-en	飛んで	
	付帯	-aanuu	tub-aanuu	飛びながら	
	並列	-tari	tu-tari	取ったり	
	目的	-ia	tub-ia	飛びに	

- 分布及び機能について

表 13 のように否定・非過去・過去接辞には複数の形式があり、形態統語的機能及び分布が異なる（グロスでは特に書き分けを行っていない）。

否定接続接辞 -an、非過去接辞 -ii、非過去連体接辞 -in、過去接続接辞 -ta にはさらに動詞接辞が後接しうる（3.2.2.3-4 参照）。特に過去接続接辞 -ta は通常、接辞・接語を伴う。

否定接続接辞 -an、過去連体接辞 -in、過去連体接辞 -tan が作る形式は、単独で主節（及び単文）の主動詞になるほか、名詞の前で名詞修飾節を作る。また文末助詞 =doo 及びコピュラの前に分布する³⁸。

過去形 -ti は通常単独では副動詞として機能しないが、名詞接辞 -ya, -mu を伴う形では副動詞として機能する。この場合事態時は主節のテンスで決まる。

- (1) **mi-ce-e** **u-ti-mu** wakar-aa.
 見る-PST-TOP いる-PST-も 分かる-NEG
 「見てはいても分からない」

継起形 -en は単独及び文末助詞を伴う形で定動詞としても機能する。この場合発話時以前の出来事・状態を表す。

- (2) an c'u-en **y-en** =na?
 あの 人-DAT 言う-SEQ QUES
 「あの人に言ったか？」

● 異形態について

非過去接辞 -ii には異形態 -i- があり、接辞が後接する環境に分布する。なお、非過去接辞 -ii に直接後接しうる接辞には -ba（条件）、-roo（推量）、-su（ムード接辞及び名詞化接辞）がある。

非過去接辞 -ii、非過去連体接辞 -in が存在動詞・コピュラや派生語幹の一部などに後接した場合、語幹と融合した特殊な屈折形式が見られる（3.2.2.6 表 19、3.2.3 表 20 及び巻末付録 3 参照）。

過去接辞 -ti、過去接続接辞 -ta、過去連体接辞 -tan は、語幹との接辞境界で形態音韻的交替を示す（3.2.2.2 参照）。

³⁸ 表 13 の否定接続形 -an、非過去連体形 -in 及び過去連体形 -tan に関して、名詞修飾という機能が共通しており、接辞 -n を認める分析も一見可能である。しかし、以下表 iii のように接辞の後接の可否および助詞の異形態の分布が -an, -in, -tan で異なるため、接辞 -n を認めない分析を採用している。

表 iii -an/-in/-tan の分布の違い

		否定	非過去	過去
		-an	-in	-tan
名詞派生接辞	-su		×	×
yes/no 疑問助詞	=na		×	×
	-nya	×		×

付帯接辞-aanuu について、語幹末が母音・半母音の語幹に後接した場合接辞境界に（話者によっては随意的に）/j/ が挿入される（ex. hoo-(y)aanuu 「買いながら」）。

目的接辞 -ia は一部の動詞では異形態 -nnya として現れる³⁹。

なお、以上のように異形態が見られる形式も、議論の中では基底形（及び代表形）のみ示すこととする。

3.2.2.2 語幹の交替と形態音韻的交替

一部の動詞では、動詞接辞のうち非過去 / 非過去連体 / 継起 / 付帯 / 目的接辞が後接する語幹（以下語幹 II）と、その他の接辞が後接する語幹（以下語幹 I）が異なる（なお、本稿では、動詞を語幹 で代表させている）。よって、語幹を二つ持つクラス⁴⁰を設定する。以下表 14 に語幹 I / II の違いの例を示す。

表 14 語幹を二つ持つ動詞

	語幹 ex) 命令形	語幹 II ex) 非過去連体形
掛ける	keer-i	kee-in
歩く	akk-i	acc-in
立つ	tat-i	tac-in
cf. 取る	tur-i	tur-in

過去接辞など、子音 t で始まる接辞は語幹 I に後続する⁴¹が、この際接辞境界に形態音韻論的交替が見られる。次頁表 15 に、語幹末音と形態音韻論的交替の対応を、動詞語幹の例とともに示す。

³⁹ 音韻的環境で異形態の分布を説明できるかはまだ分かっていない。少なくとも語幹末の分節音では決まらない。

ex. 語幹 kam- 「食べる」 kannya 「食べに」、語幹 yum- 「読む」 yum-ia 「読みに」
語幹 tur- 「取る」 tunnya 「取りに」、語幹 har- 「借りる」 har-ia 「借りに」

⁴⁰ このうち語幹 I が r で終わるものは現代日本語の上 / 下一段動詞と歴史的に対応し、類推的变化（いわゆる五段化）を経ていると考えられる（ただし「見る」など一部は一語幹を一つだけ持つクラスに属する）、t, k で終わるものは破擦音分布の環境を成していた分節音が他の分節音と融合したと考えられる。

⁴¹ 次頁に示す形態音韻交替規則によって接辞境界で r が落ちるため、keer- 「掛ける」及びこれと同じタイプの動詞（語幹末音が表 14 の 6 の列のようになるもの）は、子音 t で始まる接辞が語幹 I と語幹 II のどちらに後接しているか経験的証拠から決定できない。一方、keer- と同じく語幹を二つ持つ動詞である akk- 「歩く」 tat- 「立つ」などは、語幹 II からは t で始まる接辞が後接した際の形態音韻交替を予測できず、子音 t で始まる接辞は語幹 II に後接していると考えねばならない。語幹を二つ持つクラスの中で子音 t で始まる接辞が後接する語幹を統一した方が記述として簡潔なので、keer- 「掛ける」及びこれと同じタイプの動詞も子音 t で始まる接辞は語幹 II に後接していると記述している。

表 15 動詞語幹末の形態音韻交替

例	語幹 末音	語幹 II 末音	語幹 I 末音+ _t ... (ex. 語幹 I-ti)
1 hoo-/hoo-/hoot... 「買う」		V	hoo-ti
2 utaw-(uta-)/uta-/utat... 「歌う」		V _w / V ⁴²	uta-ti
3 tur-/tur-/tut... 「取る」		r	tu-ti
4 kam-/kam-/kad... 「食べる」		m	ka-di
5 tub-/tub-/tud... 「飛ぶ」		b	tu-di
6 hus-/hus-/huc... 「干す」		s	hu-ci
7 keer-/kee-/keet... 「掛ける」	r	V	kee-ti
8 mak-/mac-/mac... 「蒔く」	k	c	ma-ci
9 mut-/muc-/mucc... 「持つ」	t	c	muc-ci
10 mir-/mir-/mic... 「見る」		r	mi-ci
11 hu-/hu-/huž... 「漕ぐ」		V	hu-ži

まだデータが少ない段階ではあるが、暫定的に上表中の 1～9 のタイプの交替を説明する規則を以下に示す。ただし 10, 11 のタイプは語例が少なくまた交替の生じる環境を特定できないので、別の動詞クラスを立てる。

動詞の形態音韻交替規則 (I III, II III の順序で適用)

I. /t/ → /d/ / voiced stop, nasal -

II. /t/ → /tʰ/ / voiceless obstruent -

III. /m, b, k, s, r, w/ → /-t

以上の規則のうち、I は上表中の 4, 5 のように m, b の後で接辞初頭の t が d に交替していることを示す。II は表中の 6, 8, 9 のように無声子音の後で t が c に交替していることを示す。V は 2～8 で語幹末子音が消失していることを示す。

以上をまとめると、動詞には 語幹が一つでかつ t で始まる接辞が後接した場合の形態音韻交替も規則で説明できるもの、 語幹を二つ認めるが形態音韻交替規則に従うもの、 語幹は一つだが t で始まる接辞が後接した場合の音韻交替は個別に記述する必要のあるものの 3 種がある。さらに、存在動詞などこの他に一部の不規則動詞を認める。なお、語幹 I, II 及び形態音韻交替の分かっている動詞について、巻末付録 2 に示す。また、その他の不規則動詞の語幹及び語形変化で分かっているものを付録 3 に示す。

⁴² 語幹末音が /w/ の動詞は語幹を一つだけ持つ動詞であるが、/i/ 及び /j/ で始まる接辞が後接した場合、/w/ が消失する (ex. uta-i (命令形)、uta-in (非過去連体形)、uta-yaanuu (付帯形)、cf. utaw-an (否定接続形))。なお、/w/ は語中では前舌母音の前に分布せず、この制限に沿った交替と言える。

3.2.2.3 従属節を作るその他の形式

定動詞から従属節を作る形式として、接続節を作るもの（接辞 -ba（条件）・-ŋa（順接・逆接）、助詞 =naren⁴³（理由）・=munži ~ =munnyi（譲歩）・=kedo（逆接））、名詞節（補文）を作るもの（助詞 =ten（引用））が認められる。

接続接辞 -ba は非過去接辞 -ii、否定接続接辞 -an、過去接続接辞 -ta に後接する。過去接続接辞 -ta、及び一部の動詞（動詞 sir-「する」、存在動詞 ar-, ur-、派生語幹 -oor-）の非過去形に後接する際、異形態 riba で現れる（ただし、動詞「する」の非過去形に後接する際の交替は随意的である）。-ba が作る接続節は、否定接続形・非過去形に付く場合は主に主節事態の生じる条件を表し、過去形に付く場合は主に主節自体の生じた原因 / 背景を表す。

-ŋa, =naren, =munži, =munnyi, =kedo は動詞の否定接続形 -an、非過去連体形 -in、過去連体形 -tan に接続する。

3.2.2.4 その他の定動詞接辞及び文末助詞

本稿では 3.2.2.2 節で扱った接辞に加え、定動詞に後接して主節（及び単文）の主動詞を作る接辞も、定動詞接辞に含める⁴⁴。また、主に文末に分布する助詞を文末助詞とする。文末助詞は名詞・形容詞にも後接する。ここで扱う定動詞接辞と文末助詞は一般にムード・モダリティなどに関わる機能を有する点が共通している。

定動詞接辞として推量の接辞（-roo, -ra, -mee）とムードに関わる接辞（-su, -soo⁴⁵）がある。また、文末助詞として yes/no 疑問 =na、疑念 =ka、伝聞・推量 =bee、可能性 =haa その他 =yaa, =yo, =doo があるが、機能が特定出来ないものが多い。

● 定動詞接辞

推量の接辞は -roo, -ra, -mee という形態がある。-roo は非過去接辞 -ii 及び過去接続接辞 -ta に、-ra は過去接続接辞 -ta とコピュラの非過去形 ža に、-mee は否定接続接辞 -an に後接する。

接辞 -su は否定接続接辞 -an、非過去接辞 -ii、過去接辞 -ta に後接する。-su が作る形式は、単独で疑問文の述語になるほか、コピュラや文末助詞の =na, =ka などが後接できる。-su は説明のムードなどを表していると考えられるが意味機能の詳細は未詳である。

⁴³ 動詞 nar-（「なる」あるいはコピュラ）の継起形（-en）が文法化した可能性がある。話者によっては =munen という形式も見られる。

⁴⁴ 3.2.2.1 の図 5 でみたように主節（及び単文）の主動詞にはコピュラが後続しうするため、コピュラが後続するか否かのみを名詞の品詞認定の基準に用いると、動詞からの名詞派生と定動詞が作る節が区別できず、定動詞接辞と派生接辞の区別ができない。そこで、定動詞が一般に 3.2.2.1 の表 11 の構造をもつことから、動詞がテンス指定されているかどうかを補助的な基準として用いることとする。すなわちテンス指定された動詞が作るものを定動詞節とし、これに後接し主に主節（および単文の）主動詞をなすものを定動詞接辞としている。また、テンスをとっていない動詞に後接してコピュラが後接できる形式にする接辞を、名詞派生接辞として扱う。

⁴⁵ -soo は定動詞接辞あるいは名詞派生接辞の -su に主題接辞 -ya が後接したものが文法化した可能性がある。-su と異なり、コピュラや =na, =ka の前には分布しない。

以下表 16 に -roo, -ra, -mee, -su が後接した語形の例を示す。

表 16 その他の定動詞接辞

	形態	語例	グロス
推量	-roo	tub-i-roo	飛ぶ-NPST-INFR
		tu-da-roo	飛ぶ-PST-INFR
	-ra	tu-da-ra	飛ぶ-PST-INFR
		ža-ra	COP.NPST-INFR
-mee	ik-an-mee	行く-NEG-INFR	
ムード接辞	-su	ik-an-su	行く-NEG-MOD
		tub-i-su	飛ぶ-NPST-MOD
		tud-a-su	飛ぶ-PST-MOD

● 文末助詞

疑問詞疑問文については文末に接辞によるマークは特に必要としないが、yes/no 疑問文については =na はという接辞でマークされることが多い。

=na は、名詞及び名詞句に後接するほか、否定接続接辞 -an、非過去連体接辞 -in、過去接辞 -ti、継起接辞に -en に後接する。非過去連体形に後接するとき異形態 -nya で現れる⁴⁶。

疑念をあらわす =ka は、名詞及び名詞句に後接するほか、否定接続接辞 -an、非過去連体接辞 -in、過去接辞 -ti、過去接続接辞 -ta、継起接辞 -en に後接する。否定接続接辞と非過去連体接辞に後接する場合、異形態 -kka を生じる（否定接続接辞の場合は随意的である）。

以下の表 17 に動詞 ik-「行く」を例に =na, =ka の異形態の分布を示す。

表 17 疑問 / 疑念助詞の異形態

		否定	非過去連体	過去	継起
		ik-an	ic-in	iž-i/iž-a	iž-en
yes/no 疑問	分布	=na	-nya	=na	=na
	語例	ik-an=na	ic-in-nya	iž-i=na	iž-en=na
疑念	分布	=ka/-kka	-kka	=ka	=ka
	語例	ik-an=ka	ici-kka	iža=ka	iž-en=ka
		ik-a-kka		iži=ka	

⁴⁶ =na / -nya の分布は、音韻的環境では説明できない。丁寧形を派生させる接辞 -eer- の非過去形 -en は継起形 -en と同音異義形式だが、yes/no 疑問の場合 =na / -nya のどちらが後接するかで丁寧非過去形 / 継起形のどちらかであるか分かる。

- ex) a. kac-en =na?
 書く-POL.NPST QUES 書く-SEQ-QUES
 「書きますか」 「書いたか」
- b. kac-en-nya?

=doo は名詞あるいは動詞の否定接続形 -an、非過去連体形 -in、過去連体形 -tan に後接する。また形式名詞 mun, wake 及び引用の =ten も文末助詞と似た統語的・意味的機能を持つ。

3.2.2.5 派生接辞

● 動詞語幹派生接辞

本稿では、動詞語幹に後接して 3.2.2.1 の表 13 で挙げた定動詞接辞が付く形式を作る接辞を、動詞語幹派生接辞に分類する。以下表 18 に機能・(後接する語幹-)接辞・語例・日本語対訳を示す。

表 18 動詞語幹派生接辞

機能	(語幹-)接辞	語例	日本語対訳
継続	II-oor-	tub-oor-i	飛んでいる
結果	II-aar-	mir-aar-i	見てある
丁寧	II-eer-	kee-eer-aa	掛けません
使役	I-as-	keer-as-ii	掛けさせる
受身 / 状況可能	I-ar-	kam-ar-in	食べられる
能力可能	I-iisir-	yum-iis-in	読める

継続 / 結果接辞は母音 / 半母音語幹に後接する際 (話者によっては随意的に) 接辞境界に /j/ が挿入される (ex. hooyon 「買っている」 hooyan 「買ってある」)。

丁寧接辞は話者尊敬も表すようだが、機能の詳細は未詳である。

● 名詞派生接辞

本稿では、動詞の屈折形式に後接してコピュラが後接できる形式を作るものを名詞派生接辞に分類する。派生接辞 -su⁴⁷, -i が認められ、-su は非過去接辞 -ii に、-i は語幹 II に後接する。

-su, -i は共に名詞接辞が後接して動名詞的な意味機能を担う。-i が作る名詞は随意的にコピュラを伴って名詞述語としても機能し、主語の動作・状態を表す。一般に派生語幹によりアスペクトを指定された場合 -i は後接しない。-i の作る名詞述語のテンス・アスペクト解釈は文脈による。-i の作る名詞と形式名詞 kata⁴⁸ の複合語が見られ、これも機能の似た名詞述語を作る。

⁴⁷ -su に名詞接辞が後接する場合、ムード接辞 -su と異なって非過去接辞の後にしか分布せず、また動名詞的な意味機能を持つので、派生接辞 -su を設けている。

⁴⁸ 鹿児島方言の「動詞連用形 + カタ」が同様の機能を持つことが木部 (1990) に報告されており、上嘉鉄方言に見られる動詞語幹 -i + kata は日本語九州方言から語形及び用法が借用されたものである可能性がある。また、動詞語幹 -i + kata は動詞の目的語となることもあるが、機能などは未詳である。

(3) acc-i-su-kamu k'uruma nur-e-e raku = doo.
 歩く-NPST-NML-より 車 乗る-NML-TOP 楽 SFP
 「歩くより車に乗る方が楽だ」

(4) nuu {sii/ s-i+kata} =yo.
 何 する.NML する-NML+FN SFP
 「何してる？」

— see {num-i/ num-i+kata/ num-on} =doo.
 酒 飲む-NML 飲む-NML+FN 飲む-CONT.NPST SFP
 「酒飲んでる」

3.2.2.6 コピュラについて

ここではコピュラについて述べる。名詞は随意的にコピュラまたは文末助詞を伴って名詞述語を構成する。コピュラは単独で述語になれない点で他の動詞と異なるが、語形変化は存在動詞 ar-「ある」及び nar-「なる」と共有しており、本稿では動詞のサブカテゴリとして扱う。否定形及び過去時制形式では ar- からの、非過形に接辞が後接する場合及び継起形で nar- からの補充法が見られるが、その他の場合はコピュラ独自の語形である。なお、nar- の継起形は理由を表す。以下表 19 にコピュラの屈折を示す。

表 19 コピュラの屈折

	機能	語形	備考(分布)
	否定	ar-aa	
	否定接続	ar-an	
定動詞	非過去	ža	単独及び-roo/-ra/-su/-soo の前
		nar-i-	-ba/-su の前
	非過去連体	žan	
	過去	a-ti	
	過去接続	a-ta	
	過去連体	a-tan	
副動詞	継起(理由)	nar-en	

3.2.3 形容詞形態論

形容詞は、語幹と接辞から成り、名詞及び動詞を修飾し、また単独で文の述部となりうる。語形変化としては語幹に -sar- が後接しこれが存在動詞 ar-「ある」と同じ屈折を起こすほか、名詞及び動詞の修飾において語幹に -k- (語幹によっては -sik-) が後接する独自の屈折を示す。

以下表 20 では、形容詞語幹 mai-「大きい」、minda-「珍しい」を例に取り、形容詞の屈折を示す。mai- には -k-、minda- には -sik- が後接する。

表 20 形容詞の屈折

	機能	接辞	語例	日本語対訳
定動詞	非過去	-sari	mai-sari	大きい
		-sa	mai-sa	大きい
	非過去連体	-san	mai-san	大きい
	過去	-sa-ti	mai-sa-ti	大きかった
	過去接続	-sa-ta	mai-sa-ta-su=na	大きかったのか
	過去連体	-sa-tan	mai-sa-tan	大きかった
副動詞	継起 1	-sar-en	mai-sar-en	大きくて
	継起 2	-k-u-	mai-k-u	大きく
-sik-u-		minda-sik-u	珍しく	
名詞修飾	連体	-k-a-	mai-k-a	大きな
		-sik-a-	minda-sik-a	珍しい

継起 1-sar-en と継起 2-(si)ku- の違いは、前者は節を成すより独立性の高い形式のようであるが、詳細は未詳である。また、非過去形 -sa にも動詞を修飾する用法があり、形容詞の否定は非過去形 -sa あるいは継起 2-(si)ku-⁴⁹ に否定動詞 neer- を後続させることによる。また、継起形 -(si)ku 及び非過去形 -sa はコピュラを伴って述語を成す場合がある。

⁴⁹ 話者によっては、継起 2-(si)ku- + 否定動詞のみ用い、非過去 -sa + 否定動詞を用いない。

謝辞

本稿で扱った談話資料の収集及び書き起こしに当たっては、廣育子氏、西岡恵理氏にご協力いただいた。また、簡易文法を書くに当たっては、生島常範氏、生島初女氏、澄愛島氏、西原光則氏、村上国信氏（五十音順）にご協力いただいた。また、地球研のみなさまに多くのコメントをいただいた。ここに心より御礼申し上げる。

略号

1	first person	1 人称	LMT	limitative	限界格
ABL	ablative	奪格	LOC	locative	処格
AC	adversative conjunction	逆接	MOD	mood	ムード
ADN	adnominal	連体	NEG	negation	否定
ACC	accusative	対格	NML	nominalizer	名詞化
ALL	allative	向格	NPST	non-past	非過去
CAUS	causative	使役	OMP	onomatopoeia	オノマトペ
CMPR	compromise	譲歩	PASS	passive	受動
COM	comitative	共格	PL	plural	複数
COND	conditional	条件	PLN	place-name	地名
CONJ	conjunction	接続詞	PSN	personal name	人名
CONT	continuative	継続	PST	past	過去
COP	copula	繫辞	QUES	question	疑問
DAT	dative	与格	QUOT	quotative	引用
DSC	discourse marker	談話標識	RES	resultative	結果
DUB	dubitative	疑念	RESP	response	応答表現
EXCL	exclusive ‘we’	1 人称複数除外	SEQ	sequential	継起
FN	formal noun	形式名詞	SFP	sentence final particle	文末助詞
GN/ NM	genitive/ nominative	属格 / 主格	TOP	topic	主題
INCL	inclusive ‘we’	1 人称複数包括	VOL	volitional	意志
INFR	inferential	推量	-	接辞境界	
INST	instrumental	具格	=	接語境界	
			+	複合語境界	

参考文献

岩倉市郎（1941）『喜界島方言集』東京：中央公論社。

上野善道（1991）「アクセント研究のために」『国文学解釈と鑑賞』56(1): 54-60.

（1992）「喜界島方言の体言のアクセント資料」『アジア・アフリカ文法研究』21: 41-160.

（2000）「奄美方言アクセントの諸相」『音声研究』4(1): 42-54.

上野善道・西岡敏（1993）「喜界島方言の用言のアクセント資料」『アジア・アフリカ文法研究』22: 161-312.

（1994）「喜界島方言の動詞継続相のアクセント」『琉球の方言』18・19 合併号: 145-163.

- 上村幸雄 (1972) 「琉球方言入門」 『言語生活』 251: 20–37.
- 上村幸雄 (1992) 「琉球列島の言語 (総説)」 亀井 孝・河野 六郎・千野 栄一 (編) 『言語学大辞典世界言語編下 2』 771–814. 東京: 三省堂.
- 内間直仁 (1978) 『琉球の方言 4 奄美喜界島志戸桶』 法政大学沖縄文化研究所.
- 大野眞男 (2003) 「北奄美周辺方言の音韻の特徴」 『岩手大学教育学部研究年報』 63: 51–70.
- 春日正三 (1974) 「奄美大島方言の研究」 『立正大学文学部論叢』 49: 75–136.
- 狩俣繁久 (2000) 「奄美沖縄方言群における沖永良部方言の位置づけ」 『日本東洋文化論集』 6: 43–69.
- (2008) 「トン普通語・ウチナーヤマトウグチはクレオールか 琉球・クレオール日本語の研究のために」 『南島文化』 30: 55–65. 沖縄国際大学.
- 木部暢子 (1990) 「鹿児島方言の語法—カタとジ」 『筑紫語学研究』 1: 65–71.
- 国立国語研究所 (2011, 未刊) 『「危機方言」プロジェクト報告書 (1) 喜界島方言に関する総合的調査研究 (仮題)』
- 下地理則 (2006) 「南琉球語伊良部島方言」 中山俊秀・江畑冬生 (編) 『文法を描く フィールドワークに基づく諸言語の文法スケッチ』 1: 85–117.
- 輝博元 (1981) 「喜界島・中里方言の音韻」 島田勇雄先生古稀記念論文集刊行会 (編) 『島田勇雄先生古稀記念・ことばの論文集』 591–623. 東京: 明治書院.
- (1982) 「喜界島の方言」 『国文学解釈と鑑賞』 47(9): 74–86.
- (1984) 「喜界島・坂嶺方言の音韻」 飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一 (編) 『講座方言学 10—沖縄・奄美の方言』 413–460 東京: 国書刊行会.
- 中本正智 (1984) 「南島方言の区画」 飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一 (編) 『講座方言学 10—沖縄・奄美の方言』 3–5. 東京: 国書刊行会.
- (1990) 「力行変格活用の動詞「来る」」 中本正智 (著) 『日本列島言語史の研究』 567–668. 東京: 大修館書店.
- 原口庄輔 (1979) 「日本語音調の諸相」 服部四郎・R・ヤーコブソン (編) 『言語の科学』 7: 21–69.
- 服部四郎 (1955) 「琉球語 文法」 市川三喜・服部四郎 (編) 『世界言語概説 (下)』 328–353. 研究社.
- (1977) 「琉球方言動詞“終止形”の通時的変化」 『言語研究』 72: 19–28.
- 林由華 (2009) 「琉球語宮古池間方言の談話資料」 大西正幸・稲垣和也 (編) 『地球研言語記述論集 1』 153–199.
- 松森晶子 (1989) 「自律分節理論による日本語音調の記述」 『言語研究』 95: 120–143.
- (1991) 「喜界島のアクセント交替」 『日本女子大学紀要文学部』 41: 123–138.
- Goldsmith, John (1979) *Autosegmental Phonology*. New York: Garland Publishing, Inc.
- Pellard, Thomas (2009) *Ōgami — Éléments de description d'un parler du Sud des Ryūkyū*. Doctoral dissertation. École des hautes études en sciences sociales.
- Pulleyblank, Douglas (1986) *Tone in Lexical Phonology*. Dordrecht: Reidel Publishing Company.

付録1 名詞のアクセント分類

型 拍数	A	B
2	cii「血」 haa「葉」 see「酒」 haa「井戸」 mii「目」 hii「木」 yaa「家」 midu「水」 turi「鳥」 hana「鼻」 gama「穴」 yama「山」 mami「豆」 hana「花」 mugi「麦」	umi「海」 nabi「鍋」 huni「船」 usu「臼」 tida「太陽」
3	hibusi「煙」 uduri「踊り」 kataci「形」 hasami「鋏」 hagami「鏡」 kuyumi「曆」	hatana「刀」 hatee「畑」 gamaku「腰回り」
4	aatuci「暁」	meerabi「乙女」 tinžoo「天井」

付録2 動詞語幹

	語幹	語幹 II	語幹 I-t...
1	買う 会う	hoo- oo-	hoo-t... oo-t...
2	歌う	utaw-/uta-	uta-t...
3	取る 売る	tur- ur-	tu-t... u-t...
4	食べる	kam-	ka-d...
5	飛ぶ 眠る	tub- ninb-	tu-d... nin-d...
6	干す 使役	hus- -as-	hu-c... -a-c...
7	掛ける 浴びる 降りる 投げる やせる 出る 当てる 借りる	keer- amir- urir- nagir- yeer- ižir- atir- harir-	kee-t... ami-t... uri-t... nagi-t... yee-t... iži-t... ati-t... hari-t...
8	生きる	ik-	i-c...
9	持つ	mut-	mucc...
10	見る	mir-	mic...
11	漕ぐ	hu-	huž...
12	言う	y-	ic...
13	状況可能 / 受身	-ar-	-ari-t.../-at-t...
14	行く	ik-	ic-/iž ⁵⁰ - iž...

⁵⁰ik-「行く」の語幹 II の iž- は、継起接辞 -en- 及び派生接辞が後接するときに分布する。なお、「行く」の活用の一部は日本語の「往ぬ」に歴史的に対応する語幹に由来し、補充法になっていることが、首里方言について服部（1955）で指摘されており、上嘉鉄方言の ik- の語幹 iž- も同様に「往ぬ」に由来する可能性がある。

付録3 不規則動詞の活用

横線部は用例が確認されていない。

	いる	ある	継続	する	来る	備考
語幹 I	ur-	ar-	-oor-	sir-	kur- (<u>kuur-</u>)	派生接辞は下線形式に後接
語幹 II	ur-	ar-	-oor-	s-	s-	
意思	ur-a/ ur-oo	_____	-oor-a/ -oor-oo	sir-a/ sir-oo	kur-a/ kur-oo	
命令	ur-i	_____	-oor-i	sir-i	kuu	
定動詞	禁止	ur-una unna	_____	sir-una sinna	kur-una	
	否定	ur-aa	ar-aa	-oor-aa	sir-aa	kur-aa
	否定接続	ur-an	ar-an	-oor-an	sir-an	kur-an
非過去	uri (<u>u-</u>)	ari (<u>a-</u>)	-oori (<u>-oo-</u>)	s-ii (<u>s-i-</u>)	s-ii (<u>s-ii-</u>)	接辞は下線形式に後接
非過去連体	un	an	-on	s-in	s-in	
過去 1	u-ti	a-ti	-oo-ti	c'i	c'ii	
過去 2	u-ta	a-ta	-oo-ta	c'a	c'a	
過去連体	u-tan	a-tan	-oo-tan	c'an	c'an	
副動詞	継起	ur-en	ar-en	-oor-en	s-en	s-en
	付帯	_____	_____	_____	s-aanuu	s-aanuu
	並列	u-tari	a-tari	oo-tari	c'ari	c'ari
	目的	_____	_____	_____	s-ia	_____